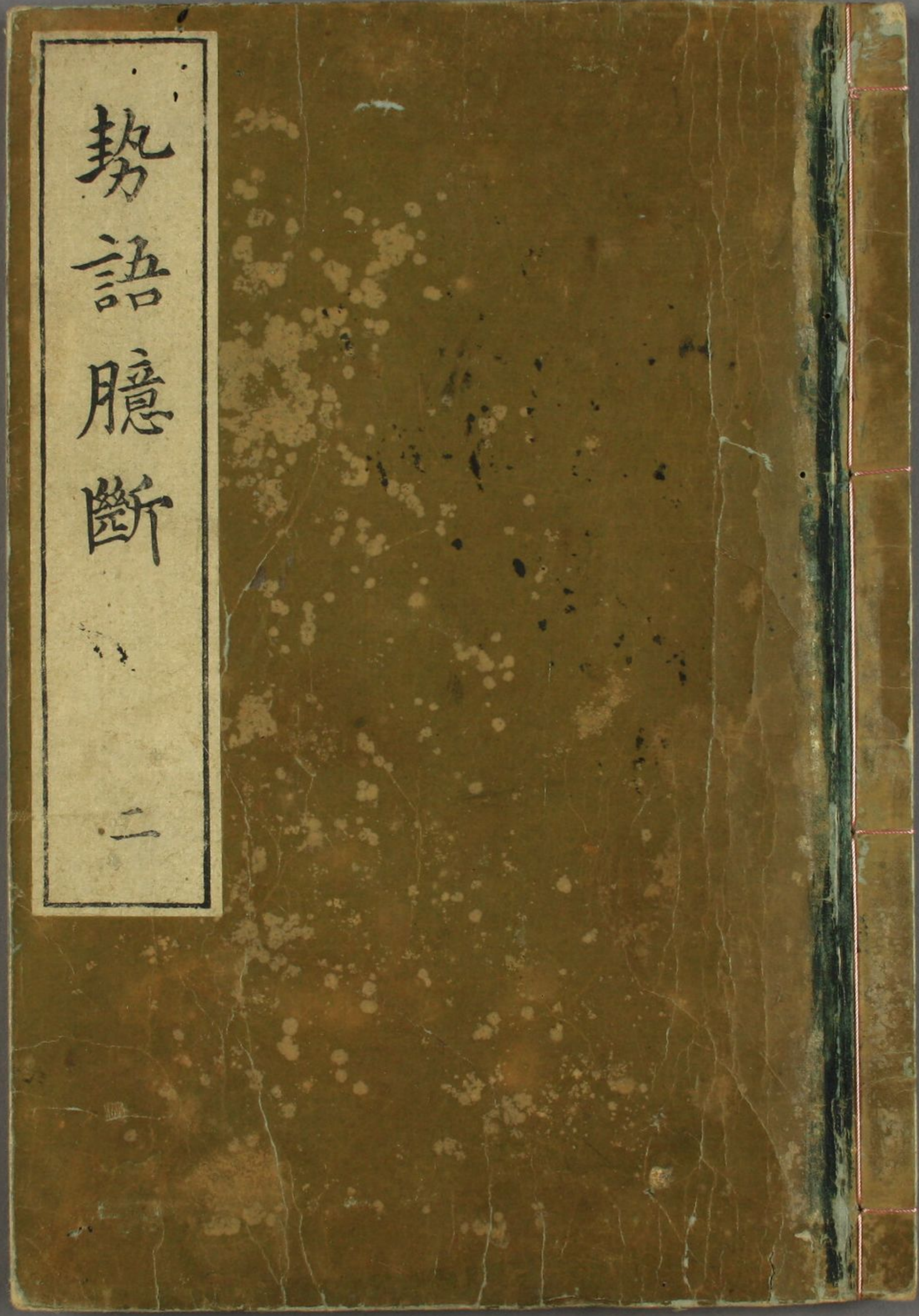




勢語臆斷

二



紅白の枝を白く染めたるは
 紅白の枝を白く染めたるは
 紅白の枝を白く染めたるは
 紅白の枝を白く染めたるは

紅白の枝を白く染めたるは

紅白

紅白の枝を白く染めたるは

紅白の枝を白く染めたるは

紅白の枝を白く染めたるは

紅白の枝を白く染めたるは
 紅白の枝を白く染めたるは
 紅白の枝を白く染めたるは

紅白の枝を白く染めたるは

紅白の枝を白く染めたるは
 紅白の枝を白く染めたるは
 紅白の枝を白く染めたるは
 紅白の枝を白く染めたるは

ついでふらふと成すぢや白菊のほく白くぬるくぬるの
とゆれにちなりなり油香に意得たれおるゆる色に
を今集り

十九段
花のしんせうにまらばくは油の
ひきりかきつるをまらばくは油の
女の内いへむをまらばくは油の
まはにへむをまらばくは油の
女のこはらへむをまらばくは油の
中よりむかひをまらばくは油の
かゝるをまらばくは油の
とらんやうりつらぬくは油の

遠くもせしむをまらばくは油の
りなる一女のめよにえむをまらばくは油の
よめよめよをまらばくは油の
もつふ事なり新に今集り長能

いついひのまらばくは油の
男の女をまらばくは油の
いぢひていついひをまらばくは油の
くをまらばくは油の

らまらばくは油の
女今の宛書はらまらばくは油の
後々ごとくまらばくは油の
いついひはらまらばくは油の

らふと申すにわかれなかにしは後の女中らおぼし
 とはなつかしき心もちのつかへうもいふはかた
 しょうせにうつるもまたいふはかたのつかへう
 としなつかしき心もちのつかへうもいふはかた
 としなつかしき心もちのつかへうもいふはかた
 としなつかしき心もちのつかへうもいふはかた

きしうりつちあそびのついでにうたをうたひかたり
 ていふにいふはかたのつかへうもいふはかた
 あるはかたのつかへうもいふはかたのつかへう
 としなつかしき心もちのつかへうもいふはかた
 としなつかしき心もちのつかへうもいふはかた

常呼二跡吾行莫國小金門爾物悲良爾念有

之吾兒乃刀自緒

とあるはかたのつかへうもいふはかたのつかへう
 限量をせんもおぼしきなりいふはかたのつかへう
 にはなり厚氏たふふもまたいふはかたのつかへう
 にはなり厚氏たふふもまたいふはかたのつかへう

とあるはかたのつかへうもいふはかたのつかへう
 とあるはかたのつかへうもいふはかたのつかへう
 とあるはかたのつかへうもいふはかたのつかへう
 とあるはかたのつかへうもいふはかたのつかへう
 とあるはかたのつかへうもいふはかたのつかへう
 とあるはかたのつかへうもいふはかたのつかへう

とひてかえり

人よらあひかすらん世の事かたむかへり

新勅撰意丹の事かたむかへり

かたむかへり世の事かたむかへり

玉ころも女のかたむかへり

よもあひかたむかへり

やあひかたむかへり

有もあひかたむかへり

日よもあひかたむかへり

世よもあひかたむかへり

あひかたむかへり

あひかたむかへり

新勅撰意丹の事かたむかへり

後撰集

あひかたむかへり

世の事

あひかたむかへり

六帖

あひかたむかへり

文選日落遊子顔

こけ女の事かたむかへり

あひかたむかへり

あひかたむかへり

あひかたむかへり

のちうらみは後悔するに似たりとて
 けしきもよき人にてはかたじけなく
 りのちのちのちのちのちのちのち

今さらしては草花の如くはなれぬ
 新勅撰意五のたゞの草花なりか
 ちとてはよき人にてはかたじけなく
 りのちのちのちのちのちのちのち
 ちのちのちのちのちのちのちのち
 りのちのちのちのちのちのちのち

詩衛風烏得諉草言樹之背

文選養生論云合歡蠲忿萱草忘憂

古今集

ちのちのちのちのちのちのちのち
 ちのちのちのちのちのちのちのち

六帖

志まはの限をわたりてはかたじけなく

七

志まはの限をわたりてはかたじけなく
 續後撰意五在るにたゞの草花なりか
 ちとてはよき人にてはかたじけなく
 りのちのちのちのちのちのちのち
 ちのちのちのちのちのちのちのち
 ちのちのちのちのちのちのちのち

中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、

中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、

中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、

二三段

中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、

中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、
 中より出て来るのは、

洞けりく――拾遺集よ

片家のねらうとぬとちひんをれよは後よはあきつ

あひまをいふやうくと河原のあやふいふれん
後後機意田意ふん業平おたのめいもあきつ後よひひん
をふとひよかきすなりよふけりかへんてはあきつ
まうにひのめふふふふふふふふふふふふふふふ
を後よけては一一いふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
とわれとてふふふふふふふふふふふふふふふふ
つげとつくと用ふ事何のふけりふふふふふふふ
つらふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふ載意田

後二位孝行

まよのこをけりひんに意のめけやとむとあへよ

新續志意云 権右衛門尉意孝

まふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

とにひてをれんあふふふふ

あはあけと絶一一いふふふふふふふふふふふ

ふけとにひやぬくまふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あふふふふふふふふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

あきりてあきりてあきりてあきりてあきりてあきり

あきりてあきりてあきりてあきりてあきりてあきり

あきりてあきりてあきりてあきりてあきりてあきり

のわたりとてはなはわくはあつちとてはなり絶よわなとては
ちとてはなはわ

これとてはなはわくはあつちとてはなり絶よわなとては
ちとてはなはわ

伊勢集批相ちとてはなり

万葉集
ちとてはなはわくはあつちとてはなり絶よわなとては

ちとてはなはわくはあつちとてはなり絶よわなとては
ちとてはなはわ

色

秋のたもねとてはなはわくはあつちとてはなり絶よわなとては
ちとてはなはわ

日本紀万葉集等々何恰とありとてはなり絶よわなとては

三三
ちとてはなはわくはあつちとてはなり絶よわなとては

は後作相成なり業平の阿保親王男のあつちとてはなり絶よわなとては
ちとてはなはわ

躬恒集

万葉第一乃云云

此の底おきつらば三田のついでに人味うらむらん
此の伊勢必山を御井とある事なりおまの志は
三田といふ人々なりける事なりけり
と大意をわたりしれぬ船なりある事なりける事なり
感せらるる上なる事なりける事なりける事なり
る事なりける事なりける事なりける事なりける事なり
共にはれなりしれぬ事なりける事なりける事なり
は事なりける事なりける事なりける事なりける事なり
と云ふは一と云ふ事なりける事なりける事なりける事なり
かり三田のけりし事なりける事なりける事なりける事なり

師勒兵歩趣龍田而其路狹峻人不得並行乃還更欲
東踰膽駒山而入中洲是謂之難而乃知也
さういふより此の事なりける事なりける事なりける事なり
ぬ事なりける事なりける事なりける事なりける事なり
とてぬ事なりける事なりける事なりける事なりける事なり
得る事なりける事なりける事なりける事なりける事なり
人々いふ事なりける事なりける事なりける事なりける事なり

新勅撰釋教不偷盜戒 法眼京圓
ぬ事なりける事なりける事なりける事なりける事なり

三田の山なる事なりける事なりける事なりける事なり
三田の山なる事なりける事なりける事なりける事なり
三田の山なる事なりける事なりける事なりける事なり
三田の山なる事なりける事なりける事なりける事なり
三田の山なる事なりける事なりける事なりける事なり

書云靈帝中平元年張角及皇甫嵩討之角餘賊在
西河白波谷為盜時俗號白波賊万葉

ゆらりゆけこちささたぬふとくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
いすかりくくくく

天和乃女を
揚ぐら内乃
女子押な

ゆらりゆけこちささたぬふとくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
和名集云悦文云比所以取飯也和名賀比

教者云けこ
或は赤子と
侵者之又祝
節子飯も
器より節子
さきふい

まろあけ
しん

けこゆらりゆけこちささたぬふとくくくくくくくくく
ゆらりゆけこちささたぬふとくくくくくくくくく
大ぬおゆきくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ゆらりゆけこちささたぬふとくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
はあちさるまおち十二のりくくくくくくくくく
定ぬくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

あつさつしん
つみせり
らんり本の
多々

わがまはまゝに枕をたたくもておのゝろひをいふは
とらふかゝるゝまゝに

梓弓中のいふ事なるは

よこらふまゝの御のれやう拾遺神樂を

らふまゝに

日本紀の昔は

あはれなるは

よこらふまゝに

はたけのまゝに

あはれなるは

よこらふまゝに

わがまはまゝに枕をたたくもておのゝろひをいふは
とらふかゝるゝまゝに
梓弓中のいふ事なるは
よこらふまゝの御のれやう拾遺神樂を
らふまゝに
日本紀の昔は
あはれなるは
よこらふまゝに
はたけのまゝに
あはれなるは
よこらふまゝに

梓弓中のいふ事なるは
よこらふまゝの御のれやう拾遺神樂を
らふまゝに
日本紀の昔は
あはれなるは
よこらふまゝに
はたけのまゝに
あはれなるは
よこらふまゝに

せりたるり日くらべても田んぼもろもろ申さうとて
 一々あつたつた女はさうさうさうさうさうさうさう
 せりて男はさうさうさうさうさうさうさうさう
 たすさうさうさうさうさうさうさうさうさう
 女さ

三田川は根とてさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 廿五段
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさう

せりてさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 業さうさうさうさうさうさうさう

此の如き様子さうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう

さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう
 さうさうさうさうさうさうさうさうさう

とうしのまゝとらへるるまゝのまゝ平はなりの下乃
 りまもあま一浦を恨みわらへるるまゝのまゝとらへるる
 うまのまゝとらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる
 羽もまゝとらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる
 あれはまゝとらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる
 すのまゝとらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる

ありてはらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる
 かしこまゝとらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる

昔家万葉よ

巨吾身之浦砥成禮々者哉コヒシキヒトノヒキヒトニタツ

後撰よ

古の池乃こころ集よわらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる

小大石集よ

よひのまゝとらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる

廿六段

あらうまゝとらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる

ぶらうまゝとらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる

五葉まゝとらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる
 目しらうまゝとらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる
 此后らうまゝとらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる
 うあまゝとらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる
 せんはらうまゝとらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる
 よしとらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる
 ろうまゝとらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる
 しろまゝとらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる
 しろまゝとらへるるまゝのまゝとらへるるまゝとらへるる

Handwritten text in a cursive script, consisting of approximately 10 lines of text.

Handwritten text in a cursive script, consisting of approximately 10 lines of text.

Handwritten text in a cursive script, consisting of approximately 10 lines of text.

新古今

續古今

定家

寛喜四年三月廿五日岩清水善宮より合々
左
右
信實
後三位範宗

判者
右
左
信實
後三位範宗

判者
右
左
信實
後三位範宗

寛喜四年三月廿五日岩清水善宮より合々
左
右
信實
後三位範宗

サケニ酢ヲ
吐逆ロニ用
意ニヌキスヲ
ヤラントナリ

~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~

万葉四

~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~

我~~~~
 日~~~~

新友知
 乙~~~~
 乙~~~~
 乙~~~~
 乙~~~~
 乙~~~~

~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~

~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~  
 ~~~~~

七九段

しほ色をばいりたる女をばふりぬ

しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ

後撰

同

金葉

しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ

七九段

しほをばいりたる女をばふりぬ

たりりらん

しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ
しほをばいりたる女をばふりぬ

白氏文集尚齒會詩序云時祕書監狄兼謩河南平盧貞以年未七十雖與會而不及列

しつゝおひらり女や〜こころのあはれ〜
 子へおひらり女や〜こころのあはれ〜
 ちつひ日本紀万葉共々倭文〜書あり神代よりわら布は
 名ひらぬまもあ〜のちつ〜あり春紀万葉令
 倭文遠祖天羽根椎神織文布云萬葉第三赤人
 勝鹿真間娘子墓と云〜書あり〜
 わりん〜のちつ〜乃書解之〜
 のちつ〜
 倭文〜
 延喜式清祭の倭文〜
 倭文〜
 倭文〜

和各卷子同
 回卷所傳
 續麻圓卷
 右也

環りりまきまは〜なり布ねん〜
 せそまは白と〜
 とおま〜
 み〜
 民の息おま〜
 い〜
 とい〜
 三十三段
 草屋此里業卒の領地なり後ま〜
 部ま〜

Handwritten text in a cursive script, likely a continuation of a narrative or a list of items.

又長教能思 十三

うごちんも乃浦の安座に於ては
能文に於てより波能子の境に於ては

乃抄よ

Handwritten text in a cursive script, possibly a title or a specific entry.

Handwritten text in a cursive script, continuing the text from the previous page.

和名集云揚氏漢語抄云田舎見
加比止

のこしはゆへにせむらる緒のこはなほのこはなほのこはなほ
とみはゆへに法徳ありていかにあつてのこはなほのこはなほ
はなほとありては法徳ありていかにあつてものこはなほ
ていかにあつてものこはなほ

清少納言
上氷のこはなほのこはなほのこはなほのこはなほのこはなほ

心かたのこはなほのこはなほのこはなほのこはなほのこはなほ

三十六段

しうとわらわりのこはなほのこはなほのこはなほのこはなほ

とみはゆへに法徳ありていかにあつてものこはなほのこはなほ

谷せとみはゆへに法徳ありていかにあつてものこはなほのこはなほ

見の万葉集才十四卷之六

言せとみはゆへに法徳ありていかにあつてものこはなほのこはなほ

はなほとありては法徳ありていかにあつてものこはなほのこはなほ

とみはゆへに法徳ありていかにあつてものこはなほのこはなほ

とみはゆへに法徳ありていかにあつてものこはなほのこはなほ

とみはゆへに法徳ありていかにあつてものこはなほのこはなほ

十二

なせとみはゆへに法徳ありていかにあつてものこはなほのこはなほ

詩周南云葛之覃兮施于中谷維葉萋々女蘿亦細

草抽莖信不功憑高出嶺上假樹入雲中

三十七段

とみはゆへに法徳ありていかにあつてものこはなほのこはなほ

とみはゆへに法徳ありていかにあつてものこはなほのこはなほ

とみはゆへに法徳ありていかにあつてものこはなほのこはなほ

とみはゆへに法徳ありていかにあつてものこはなほのこはなほ

ウニコミ
タキナリ
護影ト
詔影

女帝をばしらすまのさかきくさのつらきつらき
あまのこころひびきききききききききききききききき
形助撰意をばりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
りきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
んきりかゝ花の色もきりきりきりきりきりきりきりきり
りきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
りきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
歌安倍清行朝臣きりきり

あまのこころひびきききききききききききききききき
りきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
んきりかゝ花の色もきりきりきりきりきりきりきりきり
りきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
りきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
かきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
あまのこころひびきききききききききききききききき

見しつらきまよ

あまのこころひびきききききききききききききききき
りきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
んきりかゝ花の色もきりきりきりきりきりきりきりきり
りきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
りきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
あまのこころひびきききききききききききききききき

あまのこころひびきききききききききききききききき
りきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
んきりかゝ花の色もきりきりきりきりきりきりきりきり
りきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
りきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきりきり
あまのこころひびきききききききききききききききき

二一の
 んまふ
 しとひと
 りよしま
 らむあ
 いぬい
 まくま

讀ち今意しむるにきくはるはるのよりの
 事とけふしめあはるるにきくはるはるの
 よめしむるにきくはるはるの

かる
 西院の
 淳和天皇諱大伴桓武天皇第三皇子也御位の後
 西院まかへしはるるにきくはるはるの
 大をたふしむるにきくはるはるの

三十九段
 西院の
 淳和天皇諱大伴桓武天皇第三皇子也御位の後
 西院まかへしはるるにきくはるはるの
 大をたふしむるにきくはるはるの

西院の
 淳和天皇諱大伴桓武天皇第三皇子也御位の後
 西院まかへしはるるにきくはるはるの

崇子内親王母橘船子正四位上清野女承和十五
 年五月十五日薨十九歳今年六月二嘉祥と改元
 わりりれい嘉祥元年なり

西院の
 淳和天皇諱大伴桓武天皇第三皇子也御位の後
 西院まかへしはるるにきくはるはるの

西院の
 淳和天皇諱大伴桓武天皇第三皇子也御位の後
 西院まかへしはるるにきくはるはるの

まつたての御所の御座り
 しるべき御座り
 阿久比志の御所の御座り
 まつたての御所の御座り
 阿久比志の御所の御座り
 まつたての御所の御座り
 阿久比志の御所の御座り
 まつたての御所の御座り

阿久比志の御所の御座り
嵯峨天皇。延。楊良太后。至。舉。順。文德實錄三代實
 録等より入るなり。御所下は強ん

阿久比志の御所の御座り
 まつたての御所の御座り
 阿久比志の御所の御座り
 まつたての御所の御座り

まつたての御所の御座り
 阿久比志の御所の御座り
 まつたての御所の御座り
 阿久比志の御所の御座り
 まつたての御所の御座り

まつたての御所の御座り
 阿久比志の御所の御座り
 まつたての御所の御座り

まつたての御所の御座り
 阿久比志の御所の御座り
 まつたての御所の御座り
 阿久比志の御所の御座り

まつたての御所の御座り
 阿久比志の御所の御座り
 まつたての御所の御座り
 阿久比志の御所の御座り
 まつたての御所の御座り
 阿久比志の御所の御座り
 まつたての御所の御座り
 阿久比志の御所の御座り

まつたての御所の御座り
 阿久比志の御所の御座り

イ定ヲ
貞トアリ

一説
殊トアリ

みくのまがらうをいひしとくね事ゆきしれをた
らうらんこのほりねははるるうらと内親王のゆめ
みまきなるらんちり内親王とらるる又定とらる
こはれがまもはげくこくけり城まほりゆめり
嵯峨天皇源定 正三位 至 後四位 舉 左馬允 順位上
大納言 右京大夫 正五位上 能登

四段
守

しうらの男けきとらぬ女とあひりり
はらわぬ女とら信持まよとらうちとらあはる
あの中まよとらうちとらうちとらあはる
のぬやうらうらうらうらうらうらうら
びのぬやうらうらうらうらうら
さうらうらうらうらうらうらうらうら

うらひやうら

うらひやうらうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうらうら

うらひやうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうら
うらひやうらうらうらうらうら

サコフハ
ミカコツナリ
俗ニサウコツ
イヘナリ

ちきりせしめしむる

とてあはれなむを哀れむる

いふはなむを哀れむる

いふはなむを哀れむる
えとえぬらん

女はしらすなむを哀れむる

かたけしらすなむを哀れむる

とていふ孟子曰朝廷莫如爵郷黨莫如齒

ちきり集ふ忠孝長幼の事なり

とていふ孟子曰朝廷莫如爵郷黨莫如齒

とていふ孟子曰朝廷莫如爵郷黨莫如齒
の事なり忠孝長幼の事なり

いふはなむを哀れむる

いふはなむを哀れむる

いふはなむを哀れむる

いふはなむを哀れむる
とていふ孟子曰朝廷莫如爵郷黨莫如齒
の事なり忠孝長幼の事なり

男はしらすなむを哀れむる

韓非子云楚人卞和抱其璞而哭於楚山之下三日
三夜泣盡繼之以血易云泣血連如大和物終は
ぬるにぬるを哀れむる

此の書は...
 續後撰...
 此の書は...
 續後撰...
 此の書は...
 續後撰...
 此の書は...
 續後撰...

松尾中納言
 おたけよこれ
 こよもよ
 乃たれよ
 いもよ
 なるるる
 此の書は...
 續後撰...

何所至而逐者志津流与人向者不飽別之淚河至而
 と...
 業よ...
 な...
 此の書は...
 續後撰...
 此の書は...
 續後撰...
 此の書は...
 續後撰...

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian script. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines, reading from right to left. The characters are fluid and interconnected, characteristic of such scripts.

Handwritten text in a cursive script, likely a form of Arabic or Persian script. The text is arranged in approximately 10 horizontal lines, reading from right to left. The characters are fluid and interconnected, characteristic of such scripts.

勢語臆斷書二終

